ルカの福音書　11 回
2 人の証人
ルカ 2：25～38

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエス誕生後の 40 日間の出来事
      ②8 日目のイエスの割礼
      ③40 日目のマリアの清め
      ④敬虔な人シメオンの預言
      ⑤女預言者アンナの伝道

   (2) この箇所では、イエスがメシアであることを証言する 2 人の証人が登場する。
      ①シメオンは、「正しい、敬虔な人」であり、預言者である。
      ②アンナ（ハンナ）は、女預言者である。
      ③この 2 人はイエスのメシア性を証言し､その生涯がどうなるかを予告している。

2. アウトライン
   (1) シメオンの預言（25～35 節）
   (2) アンナの伝道（36～38 節）

3. 結論
   (1) 福音のユダヤ性
   (2) 福音の普遍性

2 人の証人の証言について学ぶ。

Ⅰ．シメオンの預言（25～35 節）

1. 25～26 節

Luk 2:25　そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた。また、聖霊が彼の上におられた。

Luk 2:26　そして、主のキリストを見るまでは決して死を見ることはないと、聖霊によって告げられていた。

(1) ヨハネとイエスの対比に注目しよう。
   ①ヨハネの場合は、割礼と命名の後、ザカリヤによる賛美と預言があった。
   ②イエスの場合は、シメオンによる賛美と預言がある。

(2) シメオンが誰なのかよりも、彼が果たしている役割の方が重要である。

①彼は、旧約的な意味での義人である。「正しい、敬虔な人」

＊彼は、信仰によって義とされている。

②彼は、「イスラエルが慰められるのを待ち望んでいた」

＊つまり、メシアの到来がもたらす慰めを待ち望んでいたのである。

＊「エルサレムの贖い」（38 節）を待ち望んでいたのと同じである。

＊シメオンは、律法学者たちとは違っていた。

＊彼は、イスラエルの残れる者の 1 人であった。

③「聖霊が彼の上におられた」

＊これは、旧約的な意味での聖霊の支配を意味している。

＊彼は、旧約時代の預言者の系譜に属する人物である。

(3) シメオンには、生きている間にメシアが誕生するという啓示が与えられていた。

①「主のキリスト」とは、「ヤハウェによって油注がれたお方」という意味である。

②あるいは、「主が遣わすキリスト」という意味である。

③彼は、神との親密な関係を維持することによって、神の声を聞いていた。

2. 27～28 節

Luk 2:27　シメオンが御霊に導かれて宮に入ると、律法の慣習を守るために、両親が幼子イエスを連れて入って来た。

Luk 2:28　シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。

(1) 彼は、聖霊の導きによって宮（神殿）に入った。

①「神殿の境内」（新共同訳）は正確な訳であるが、意訳である。

②聖所ではなく、婦人の庭であろう。

(2) ちょうどその時、イエスの両親がイエスを連れて入って来た。

①宮に来た目的は、「律法の慣習を守るため」である。

②マリアの清めも目的のひとつであるが、関心はイエスに向けられている。

③この出会いの背後に、御霊の摂理的導きがあった。

④シメオンは、超自然的な啓示により、幼子がメシアであることを知った。

⑤シメオンは幼子を抱き、神に向かってほめ歌を歌った。

3. 29～32 節

Luk 2:29　「主よ。今こそあなたは、おことばどおり、／しもべを安らかに去らせてください

ます。

Luk 2:30　私の目があなたの御救いを見たからです。

Luk 2:31　あなたが万民の前に備えられた救いを。

Luk 2:32　異邦人を照らす啓示の光、／御民イスラエルの栄光を。」

(1) シメオンの歌は、「ヌンク・ディミティス」である。

①「今こそ、私を去らせてくださいます」という意味

②これは、ルカが紹介する 5 番目の賛歌である。

③「今こそ」に強調点がある。

④彼は、もう死んでもよいと感じた理由を述べる。

(2)「私の目があなたの御救いを見たからです」

①彼は歴史の目撃者となった。

②「御救いを見た」には、ヘブル語のことば遊びがある。

＊イェシュア（イエス）とイェシュアー（救い）

(3)「あなたが万民の前に備えられた救いを」

①彼は、万民の前に備えられた救いを見た。

②イザ 52：10

Isa 52:10　【主】はすべての国々の目の前に／聖なる御腕を現された。／地の果てのすべての者が／私たちの神の救いを見る。

(4)「異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの栄光を」

①幼子は、異邦人に救いをもたらす。

＊初臨のメシアの働き

＊ルカの福音書の強調点は、異邦人の救いにある。

②イザ 42：6

Isa 42:6　「わたし、【主】は、義をもってあなたを召し、／あなたの手を握る。／あなたを見守り、／あなたを民の契約として、国々の光とする。

③幼子は、御民イスラエルの栄光となる。

＊再臨のメシアは、イスラエルの上に栄光を輝かせる。

4. 33～35 節

Luk 2:33　父と母は、幼子について語られる様々なことに驚いた。

Luk 2:34　シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしと

して定められています。

Luk 2:35　あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」

(1) 両親の驚きの理由

①シメオンを通して、天使の告知以上の内容が啓示された。

②イエスの働きは、イスラエルの民だけでなく全人類に祝福をもたらす。

③初対面のシメオンがこれほどまでに幼子の将来を預言することができた。

(2) シメオンは両親を祝福し、母マリアに預言的ことばを語った（4 つの部分から成る）。

①イエスは、イスラエルの民を二分する。

＊傲慢な者は倒れ、謙遜でメシアを信じる者は立ち上がる。

②イエスは罪を暴くので、この世の人々はイエスに反対する。

③マリアの心を剣が刺し貫くことになる。

＊これは、十字架刑を目撃したときのマリアの悲しみの預言である。

④イエスにどういう態度を取るかによって、人の心の思いは明らかになる。

Ⅱ．アンナの伝道（36～38 節）

1．36～37 節

Luk 2:36　また、アシェル族のペヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代の後、七年間夫とともに暮らしたが、

Luk 2:37　やもめとなり、八十四歳になっていた。彼女は宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えていた。

(1) アンナという女預言者

①女預言者ということばは、新約聖書ではここと黙示 2：20 にしか出てこない。

＊「女預言者イゼベル」（黙 2：20）

②彼女は、アシェル族のペヌエルの娘である。

＊アシェル族という名が出ているのは、彼女のユダヤ性を強調するためであろう。

＊失われた北の十部族論は成立しない。

③非常に年をとっていた（84 歳）。

＊結婚後 7 年間夫とともに暮らしたが、やもめとなった。

④宮を離れず、断食と祈りをもって、夜も昼も神に仕えていた。

＊「夜も昼も」は、ヘブル的表現で、「いつも」という意味である。

＊つまり、神殿での礼拝にいつも参加していたという意味である。

＊彼女もまた、イスラエルの残れる者の 1 人である。

2. 38 節

Luk 2:38　ちょうどそのとき彼女も近寄って来て、神に感謝をささげ、エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人に、この幼子のことを語った。

(1) アンナもまた聖霊に導かれて、その場に近寄って来た。

①イエスの一家とシメオンがいた場所である。

＊小さな集まりであるが、ここから世界の歴史を変える動きが始まる。

②イエスを見て、彼女は神に感謝を献げた。

③彼女の預言は、省略されている。

④シメオンと同じような預言があったと思われる。

(2) 彼女は、メシアの到来を待ち望んでいたすべての人に、幼子のことを言い広めた。

①「エルサレムの贖いを待ち望んでいたすべての人」

＊エルサレムとは比ゆ的にイスラエルを指す。

②イエスはこの段階から、広く知られるようになった。

③シメオンとアンナという 2 人の証人が預言を語った。

＊彼女の預言は、信じる人にも、信じない人にも、衝撃を与えた。

結論

1. 福音のユダヤ性

(1) ルカの福音書 1 章と 2 章は、旧約時代から新約時代への移行の記録である。

(2) ルカの福音書の中の 4 つの歌（詩篇）

①エリサベツの歌（1：42～45）

②マリアの歌（1：46～55）

③ザカリヤの歌（1：68～79）

④シメオンの歌（2：28～32）

(3) これらの歌の特徴

①詩篇の形式を保持している。

②旧約聖書への言及が多い。

③神の約束の成就を歌っている。

④ユダヤ的内容から普遍的内容への移行が見られる。

(4) ユダヤ性から切り離されたキリスト教は、根無し草になる。

①メシアは割礼を受けたユダヤであった。

②メシアは律法の下にある者とされた。

③メシアは 100%、モーセの律法に従われた。

④メシアは、律法の下にある者を救うために、ユダヤ人となられた。

2. 福音の普遍性

(1) シメオンの預言の中にあるメシア預言の引用

①イザ 42：6

Isa 42:6 「わたし、【主】は、義をもってあなたを召し、／あなたの手を握る。／あなたを見守り、／あなたを民の契約として、国々の光とする。

＊「民の契約」とは、イスラエルの民と契約を結ぶ仲介者の意味。

＊「国々の光」とは、異邦人のためのメシアという意味。

②イザ 49：6

Isa 49:6 主は言われる。／「あなたがわたしのしもべであるのは、／ヤコブの諸部族を立たせ、／イスラエルのうちの残されている者たちを／帰らせるという、小さなことのためだけではない。／わたしはあなたを国々の光とし、／地の果てにまでわたしの救いを／もたらす者とする。」

＊メシアは、イスラエルを救うだけではない。

＊異邦人の救い、福音の普遍性が預言されている。

(2) 福音は、エルサレムから地の果てまでも拡がっていく。

①神は、全人類を救うためにイスラエルを選ばれた。

②本来のキリスト教は、普遍的ユダヤ教である。

2022 年 01 月 02 日（日）　12 回　イエスの成長

ルカの福音書　12 回

イエスの成長

ルカ 2：39～52

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエス誕生後の 40 日間の出来事
         ＊8 日目のイエスの割礼
         ＊40 日目のマリアの清め
         ＊シメオンとアンナの祝福のことば
      ②イエスの成長
         ＊ナザレでの子ども時代
         ＊12 歳でのエルサレム訪問
         ＊公生涯までの生活

2. アウトライン
   (1) 12 歳までのイエス（39～40 節）
   (2) 12 歳でのエルサレム訪問（41～50 節）
   (3) 12 歳以降のイエス（51～52 節）

3. 結論
   (1) メシアの受肉
   (2) エルサレムの中心性

イエスの成長について学ぶ。

Ⅰ．12 歳までのイエス（39～40 節）

1. 39 節

Luk 2:39　両親は、主の律法にしたがってすべてのことを成し遂げたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰って行った。

(1) 両親は、主の律法にしたがってすべてのことを成し遂げた。
   ①ヨセフとマリアは、敬虔な人たちであった。
   ②彼らは、ガリラヤの町ナザレに帰って行った。
   ③そこが、イエスが育つ町となる。

(2) ルカが省略したことがいくつかある。

①ヘロデ大王による迫害

②エジプトへの逃避行とナザレへの帰還（マタ 2：13～21）

③この段階で「メシアの拒否」を示すことは、ルカの目的ではない。

④ルカでは、メシアが初めて拒否されるのは、ナザレの会堂においてである。

＊イエスによるメシア宣言（ルカ 4：16～30）

＊この出来事は、メシアの公生涯のパラダイムになる。

＊同胞から拒否されたお方が、異邦人の救い主となる。

2. 40 節

Luk 2:40　幼子は成長し、知恵に満ちてたくましくなり、神の恵みがその上にあった。

(1) バプテスマのヨハネとの対比（ルカ 1：80）

Luk 1:80　幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に公に現れる日まで荒野にいた。

(2) イエスの成長記録

①肉体的成長

＊普通の赤子が通過する段階をすべて通過された。

②知的成長

＊知恵に満ちてとは、体験した知識を適用する能力があったということ。

③霊的成長

＊神の恵みがその上にあった。

＊ここでは、神の寵愛を受けていたという意味。

(3) 成長記録の要約

①原罪のない人間性が、どのように成長するかの例証がここにある。

②後にも先にも、これが唯一の完ぺきな成長の例である。

③12 歳までのイエスに関する記述は、これだけである。

④ルカの目的は、イエスの公生涯を記すことにある。

⑤イエスの知恵については、次の箇所で具体的な解説が用意されている。

Ⅱ．12 歳でのエルサレム訪問（41～50 節）

1. 41 節

Luk 2:41　さて、イエスの両親は、過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた。

(1) 3 つの巡礼祭（成人男子がエルサレムに上って祝う祭り）

①過越の祭り

②七週の祭り（五旬節、ペンテコステ）
③仮庵の祭り

(2) 離散以降、ディアスポラのユダヤ人たちにはこれを実行するのが困難になった。
①年に一度、過越の祭りにはエルサレムに上る。
②あるいは、数年に一度、生涯に一度など、経済状況に応じて異なる。
③生涯、一度もエルサレムに上らないユダヤ人も多くいた。

(3) パレスチナのユダヤ人たち
①過越の祭りの優位性が認識されていた。
②少なくとも、年に一度、過越の祭りの時にエルサレムに上るように努力した。
③ヨセフとマリアは、過越の祭りには毎年エルサレムに上った。
④マリアは必ずしも行く必要はなかったが、信仰の表現としてそれを実行した。
⑤紀元 1 世紀のユダヤ人社会では、婦人の参加は一般的な習慣になっていた。
⑥ちなみに、エルサレム以外で行う過越の祭りは、モーセの律法違反である。

2. 42～43a 節

Luk 2:42　イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習にしたがって都へ上った。
Luk 2:43a　そして祭りの期間を過ごしてから帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。

(1) 12 歳という年齢
①ユダヤ人の少年が父の職業を学び始める年齢である。
②13 歳になると、神の前で成人した男子と見なされるようになる。
「父親は、13 歳までは息子に神について話すが、バール・ミツバ以降は、神に息子について話す」
③バール・ミツバという成人式の習慣は、後代のものであろう。
④イエスと預言者サムエルの対比（1 サム 2：26）
1Sa 2:26　一方、少年サムエルは、【主】にも人にもいつくしまれ、ますます成長した。
⑤1 サム 3：10
1Sa 3:10　【主】が来て、そばに立ち、これまでと同じように、「サムエル、サムエル」と呼ばれた。サムエルは「お話しください。しもべは聞いております」と言った。
＊ユダヤ人史家ヨセフスは、これを、サムエル 12 歳の時と解説している。

(2) 両親は、イエスをエルサレムに連れて行った。
①これが初めてなのかどうか、分からない。

②12 歳でのエルサレム訪問は、イエスの生涯で画期的な経験となった。

(3) 両親は、祭りの期間を過ごしてから、帰路に就いた。

①過越の祭りは 1 日の祭りである。

②それに続いて、7 日間の種なしパンの祭りがある。

③この時代、合計 8 日間を「過越の祭り」や「種なしパンの祭り」と呼んだ。

④ユダヤ教では、巡礼者は最低 2 日間エルサレムに留まるように命じられた。

⑤8 日間エルサレムにとどまったのは、彼らの信仰表現である。

(4) 42～43a 節の主動詞は、「とどまった」である。

①訳文の比較

「少年イエスはエルサレムにとどまっておられた」（新改訳 2017）

「少年イエスはエルサレムに居残っておられた」（口語訳）

「少年イエスはエルサレムに残っておられた」（新共同訳）

②これは、両親への意図的反抗ではない。

③潜在意識の中にあった神殿や礼拝への興味が、少年イエスを捉えた。

3. 43b～47 節

Luk 2:43b　両親はそれに気づかずに、

Luk 2:44　イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを進んだ。後になって親族や知人の中を捜し回ったが、

Luk 2:45　見つからなかったので、イエスを捜しながらエルサレムまで引き返した。

Luk 2:46　そして三日後になって、イエスが宮で教師たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。

Luk 2:47　聞いていた人たちはみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。

(1) 当時の巡礼者たちは、安全のためにグループ（キャラバン）を作って移動した。

①両親は、イエスがグループの中にいるものと思い込んでいた。

②自立するのは、12 歳の少年には良いことである。

(2) 3 日間の動き

①1 日目に、エリコまで行き、そこでイエスがいないことを発見した。

②2 日目に、エルサレムまで引き返した。

③3 日目に、イエスを宮で発見した。

＊最初は、劇場、商店、見世物小屋、大通りなどを探したであろう。

(3) イエスの状態

①教師たちの真ん中に座っていた。

＊教師たちとは、律法学者たちのことである。

＊当時は、ソロモンの廊でラビたちが講話を披露していた。

②イエスは、教師たちの話を聞いたり、質問したりしていた。

＊ユダヤ式教授法は、質問を多用する。

＊教師が生徒に質問したり、生徒に質問させたりする。

＊イエスの質問に教師たちは答えられなかったであろう。

③イエスは、ユダヤ的教授法を多用された。

＊マタ 22：43～45

Mat 22:43　イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは御霊によってキリストを主と呼び、

Mat 22:44　『主は、私の主に言われた。／「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。／わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするまで」』／と言っているのですか。

Mat 22:45　ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうしてキリストがダビデの子なのでしょう。」

(4) 聞いていた人々の状態

①イエスの知恵と答えに驚いていた。

②40 節の「知恵に満ちていった」が実証された。

③イエスは、天の父から霊的訓練を受けておられた。

4. 48 節

Luk 2:48　両親は彼を見て驚き、母は言った。「どうしてこんなことをしたのですか。見なさい。お父さんも私も、心配してあなたを捜していたのです。」

(1) 驚きの理由は、イエスの奉仕の内容を本当の意味で理解していないからである。

①彼らは、啓示のことばを聞いてはいた（天使、羊飼いたち、シメオンなど）。

②しかし、本当のことは理解できていなかった。

③ナザレに帰還して以降、12 年間の平凡な日常生活があった。

5. 49～50 節

Luk 2:49　すると、イエスは両親に言われた。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」

Luk 2:50　しかし両親には、イエスの語られたことばが理解できなかった。

(1) これは、ルカの福音書に出てくるイエスの最初のことばである。

（例話）劇作家は、最初のセリフを推敲して書いている。

①このことばは、メシアの公生涯の方向性を決するものである。

②私たちにとっても、口にすべきことばである。

(2) 訳文の比較

「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか」（新改訳 2017）

「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」（口語訳）

「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」（新共同訳）

①これは、ほとんど地上の両親との断絶宣言に近い。

②これは、少年イエスの心に育ったメシアとしての使命意識の表明である。

③「父の家」は「父の仕事」とも訳せる（KJV はそう訳している）。

④12 歳のイエスは、天の父からも職業訓練を受け始めていた。

⑤イエスが神を「父」と呼んだ時点から、新しい時代の幕開けとなった。

(3) 両親は、イエスのことばの意味を理解できなかった。

①弟子たちも、見たり聞いたりしていたが、本当のことは理解できていなかった。

②すべてのことが腑に落ちるのは、復活を目撃して以降である。

③ペンテコステ以降、聖霊が彼らを真理へと導いた。

Ⅲ．12 歳以降のイエス（51～52 節）

1．51 節

Luk 2:51　それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。

(1) 父なる神への従順と、地上の両親への従順の両立。

①イエスがエルサレムにとどまったのは、反抗的な動機からではないことを説明。

②両親への従順は、モーセの律法が要求する責務である。

③イエスは、大工としての職業を身に付けた。

④と同時に、メシアとして父なる神から訓練を受けた。

(2) マリアの内省

①ルカ 2：19

Luk 2:19　しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。

②ルカ 2：51b

Luk 2:51b　母はこれらのことをみな、心に留めておいた。

2. 52 節

Luk 2:52　イエスは神と人とにいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。

(1) 両親やラビたちよりも律法を理解していた少年が、約 18 年間の時を過ごす。

①肉体的成長に正比例して知恵を身に付けた。

②神と人に愛された。理想的な成長過程が描かれている。

③これ以外の情報は、何も書かれていない。

④次に登場するのは、およそ 30 歳になってからである。

結論

1. メシアの受肉

(1) 神の子が人となられた。

(2) ルカは、原罪を宿さない人間の赤子の成長を記録した。

＊これは、人類の歴史上、初めてのことである。

(3) イエスは、人間が通過する成長過程をすべて経験された。

＊肉体と魂は、徐々に成長した。

＊人間イエスは、自我に目覚めて行かれた。

＊12 歳のイエスは、神の子としての自我に目覚めた。

(4) イエスは、私たちに同情してくださる大祭司となられた。

2. エルサレムの中心性

(1) ルカの福音書は、エルサレムの神殿での出来事から始まった。

(2) 少年イエスがメシア性に目覚めたのは、エルサレムの神殿である。

(3) イエスはエルサレムでメシアとしてデビューされる（ヨハ 2 章）。

(4) メシアは、エルサレムで十字架に付く。

(5) メシアは、エルサレムで復活する。

(6) エルサレムから地の果てに福音が伝えられる。

(7) しかし、終末の出来事は、エルサレムを中心に起こる。

①大患難時代

②メシアの再臨

③メシア的王国

(8) エルサレムが国際紛争の中心になるのは、偶然ではない。

2022 年 01 月 09 日（日）　13 回　ヨハネの奉仕の始まり

ルカの福音書　13 回

ヨハネの奉仕の始まり

ルカ 3：1～6

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエスの成長
         ＊ナザレでの子ども時代
         ＊12 歳でのエルサレム訪問
         ＊公生涯までの生活
      ②イエスの公生涯は、バプテスマのヨハネの登場から始まる。

   (2) バプテスマのヨハネの奉仕（3：1～20）
      ①ヨハネの奉仕の始まり（1～6 節）
      ②ヨハネのメッセージ（7～18 節）
      ③ヨハネの奉仕の終わり（19～20 節）

2. アウトライン
   (1) 時代背景（1～2 節）
   (2) ヨハネの活動（3 節）
   (3) イザヤ書 40 章 3～5 節の成就（4～6 節）

3. 結論
   (1) 福音の歴史性
   (2) 忍耐の必要性

ヨハネの奉仕の始まりについて学ぶ。

Ⅰ．時代背景（1～2 節）

1. 1～2 節 a

Luk 3:1　皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督であり、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟ピリポがイトラヤとトラコニテ地方の領主、リサニアがアビレネの領主、

Luk 3:2a　アンナスとカヤパが大祭司であったころ、

はじめに

①ルカは、支配者の統治年によって年代を確定している。

②これは、当時の歴史家たちが採用した一般的な手法である。

③ルカは、合計 7 人の支配者を列挙している。

＊皇帝 1 人、総督 1 人、領主（国主）3 人、大祭司 2 人

(1)「皇帝ティベリウスの治世の第十五年」

①ティベリウスは、アウグストゥスの後を継いだ皇帝である。

②紀元 11 年から 2 年間、アウグストゥスと共同統治を行った。

③ティベリウスの治世の第 15 年とは、恐らく紀元 26 年であろう。

④ティベリウスは、悪名高い皇帝である。

⑤次に彼が選んだ皇帝はカリギュラで、さらに悪名高い。

⑥ティベリアという町

＊ヘロデ・アンティパスがティベリウスに献上した町である（20 年）。

＊墓地の上に建てられたので、ユダヤ人たちはこの町には住まなかった。

＊異邦人の町なので、イエスがここを訪問したという記録はない。

＊ヨハ 6：23 にのみ出てくる。

⑦バル・コクバの乱（132～135 年）以降の町の歴史

＊サンヘドリンは、セフォリスとベテ・シャメシュからこの町に移動した。

＊ラビ・シメオン・バル・ヨカイが、この町を清めた（135～145 年）。

＊その結果、ユダヤ人が 25,000 人居住するようになった。

＊それ以降の数世紀、ユダヤ教神学の中心地となる。

＊エルサレム、ヘブロン、ツファットに次ぐ第 4 の聖地となった。

＊エルサレム・タルムードと旧約聖書のマソラ本文は、ここで確定された。

(2)「ポンティオ・ピラトがユダヤの総督」

①彼は、5 代目のユダヤ総督である（紀元 26～36 年）。

②ユダヤ人に対しては敵対的であった。

③1961 年、カイサリアで彼の名を刻んだ記念碑が発掘された。

「ユダヤ総督ポンティオ・ピラトは、皇帝ティベリウスをたたえ、神殿をカイサリアの住民に捧げる」

＊この神殿は、エルサレムの神殿と同じサイズである。

(3)「ヘロデがガリラヤの領主」

①このヘロデは、ヘロデ大王の息子、ヘロデ・アンティパスのことである。

②彼は、ガリラヤの領主（国主）であった（前 4～紀元 36 年）。

＊彼は、ティベリアからガリラヤ地方を統治した。

③領主（国主）は、王よりもランクの低い地位のことである。
④彼は、バプテスマのヨハネを投獄する人物である。

(4)「その兄弟ピリポがイトラヤとドラコニテ地方の領主」
①ヘロデ・ピリポは、アンテパスの腹違いの兄弟である。
②彼は、ガリラヤの北部に領地を持った（前 4～紀元 34 年）。

(5)「リサニアがアビレネの領主」
①リサニアに関する情報はほとんどない。
②アビレネは、さらに北方の地区で、ダマスコの北西に位置する。

(6) と (7)「アンナスとカヤパが大祭司であったころ」
①アンナスは、元大祭司である（紀元 6～15 年）。
＊ローマが彼を退任させた。
②引退しても、大祭司は終身職であるため、大祭司という称号が付く。
③カヤパは、アンナスの義理の息子である（紀元 18～36 年）。
④実権はアンナスが握っていた。

＊これらの情報は、ルカの福音書の信頼性を確立するためのものである。
（ILL）手編みのセーターのほつれ

2. 2b 節

Luk 3:2b　神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ。

(1) ルカは、1 章で説明した内容を前提に、この箇所を書いている。
①ヨハネは、祭司ザカリヤの息子である。
②ヨハネは、荒野で隠れた生活をしていた（ルカ 1：80）。

Luk 1:80　幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に公に現れる日まで荒野にいた。

(2) 公の活動は、およそ 30 歳から開始した。
①旧約時代、祭司は 30 歳から奉仕を始める。
②祭司の息子ヨハネは、30 歳で活動を開始した。

(3)「神のことばが、ヨハネに臨んだ」
①神は、霊的指導者たちを迂回して、ヨハネを通して民に語りかけた。

＊歴史上、リバイバルは周辺の人々から起こった。

②神は、イスラエルの指導者たちを喜んではおられない。

③ルカは、ヨハネを預言者として紹介する。

④ルカ 1：76 の成就

Luk 1:76　幼子よ、あなたこそ／いと高き方の預言者と呼ばれる。／主の御前を先立って行き、その道を備え、

⑤預言者の召命の例（エレ 1：1〜2）

Jer 1:1　ベニヤミンの地、アナトテにいた祭司の一人、ヒルキヤの子エレミヤのことば。

Jer 1:2　このエレミヤに【主】のことばがあった。ユダの王、アモンの子ヨシヤの時代、その治世の第十三年のことである。

⑥ホセ 1：1、ミカ 1：1、ハガ 1：1 など参照

⑦バプテスマのヨハネは、旧約時代最後の預言者である。

Ⅱ．ヨハネの活動（3 節）

1．3 節

Luk　3:3　ヨハネはヨルダン川周辺のすべての地域に行って、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。

(1) ヨハネは、ただちに行動を起こした。

①ヨルダン川周辺のすべての地域に行った。

②彼は、自らの奉仕をエリヤのそれに重ねている。

③彼は、霊的覚醒をもたらすメッセージを語った。

＊それが悔い改めのバプテスマである。

(2)「罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマ」

①バプテスマによって罪が赦されるという意味ではない。

②これは、罪の赦しに関係したバプテスマ、という意味である。

③悔い改めとは、心の方向転換のことである。

④悔い改めと罪の赦しが、バプテスマに先行する。

(3) バプテスマの意味

①基本的意味は、一体化である（浸礼である）。

＊バプテスマのヨハネとの一体化

＊彼が語るメッセージ（悔い改めの必要性）との一体化

＊彼が示すメシアを受け入れる。

②ユダヤ教の洗礼との比較

＊清めのための洗礼（洗い）とは異なる。

・自分で水に入る。

・繰り返し実行する。

・クムランのエッセネ派の洗礼も、これと同じである。

＊異邦人がユダヤ教に改宗する際の洗礼とも異なる。

・自分で水に入る。

＊ヨハネの洗礼の新しさ

・ユダヤ人に悔い改めのバプテスマを命じた。

・他の人によって洗礼が施される。

・内面の変化が前提になっている。

③クリスチャンの洗礼

＊内面の変化（新生体験）が前提になっている。

＊洗礼は救いの条件ではない。

＊他の人によって施される。

＊一度限りでよい。

Ⅲ．イザヤ書 40 章 3～5 節の成就

1．4～6 節

Luk 3:4　これは、預言者イザヤのことばの書に書いてあるとおりである。／「荒野で叫ぶ者の声がする。／『主の道を用意せよ。／主の通られる道をまっすぐにせよ。

Luk 3:5　すべての谷は埋められ、／すべての山や丘は低くなる。／曲がったところはまっすぐになり、／険しい道は平らになる。

Luk 3:6　こうして、すべての者が神の救いを見る。』」

(1) ヨハネの奉仕は、イザ 40：3～5 の成就である。

①ヨハネは、荒野で叫ぶ者の声である。

＊彼は、神の御心を代弁する「声」である。

②彼は、文字どおり荒野で声を上げた。

③比ゆ的には、当時のイスラエルの民の霊的状態は、荒野であった。

④いのちがないので、実を結ぶことのない状態である。

⑤彼は、イスラエルの民の間で声を上げた。

(2) ヨハネは、メシアを受け入れるための霊的覚醒の必要性を説いた。

①当時は、王が来られる前に道路を整備し、通行が容易になるようにした。

（ILL）みゆき通り：天皇の行幸のために準備した道

②ヨハネは、文字どおりの道路工事を求めたのではない。

③荒野に道を造るとは、霊的準備のことである。

(3) メシアが到来した結果、以下のことが起こる。

①「すべての谷は埋められ、」

＊謙遜になり、真に悔い改めた人は、罪赦され満足を得る。

②「すべての山や丘は低くなる」

＊傲慢な者（律法学者やパリサイ人）は、辱められる。

③「曲がったところはまっすぐになり、」

＊正直でない者（取税人）は、正直者となる。

④「険しい道は平らになる」

＊粗野な性格の者（兵士や乱暴者）は、穏やかな性格に変えられる。

(5)「こうして、すべての者が神の救いを見る」

①ルカは、福音の普遍性を意識している。

②ユダヤ人も異邦人も、救いに与る。

③初臨の際には、多くの異邦人が救われる。

④再臨の際には、すべてのユダヤ人が救われる。

結論

1. 福音の歴史性

(1) ルカは、救済の歴史を世界史の中に位置づけようとした。

①ルカ 1：5

Luk 1:5　ユダヤの王ヘロデの時代に、アビヤの組の者でザカリヤという名の祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった。

②ルカ 3：1～2

(2) 年代を特定するためには、ティベリウス治世の第 15 年だけで十分である。

①それ以外の 5 つの年代は、広い政治的文脈を提供している。

②イエスの公生涯は、非常に複雑な政治状況の中で始まった。

(3) イエスの公生涯は、バプテスマのヨハネの登場から始まる。

①使 1：22

Act 1:22　すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした人たちの中から、だれか一人が、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。」

②使 10：37、13：24～25 参照

(4) 福音記者たちは、正直に、率直に、事実をそのまま書いている。

①私たちも、著者の意図をそのまま受け取ればよい。

2. 忍耐の必要性

(1) マラキからバプテスマのヨハネまで、約 400 年以上が経過している。

①バプテスマのヨハネの誕生から、約 30 年が経過している。

(2) 詩 37：7～11

Psa 37:7　【主】の前に静まり　耐え忍んで主を待て。／その道が栄えている者や／悪意を遂げようとする者に腹を立てるな。

Psa 37:8　怒ることをやめ　憤りを捨てよ。／腹を立てるな。それはただ悪への道だ。

Psa 37:9　悪を行う者は断ち切られ／【主】を待ち望む者　彼らが地を受け継ぐからだ。

Psa 37:10　もうしばらくで　悪しき者はいなくなる。／その居所を調べても　そこにはいない。

Psa 37:11　しかし　柔和な人は地を受け継ぎ／豊かな繁栄を自らの喜びとする。

(3) 1 ペテ 1：12

1Pe 1:12　彼らは、自分たちのためではなく、あなたがたのために奉仕しているのだという啓示を受けました。そして彼らが調べたことが今や、天から遣わされた聖霊により福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。御使いたちもそれをはっきり見たいと願っています。

①預言者たちは、自らの預言したことの成就を見ることなしに死んでいった。

(4) 私たちへの教訓

①忍耐は、神の主権への応答である。

②祈りの答えは、「イエス」と「ノー」以外に、「待て」もある。

③それでも、私たちは神を信じる。

2022 年 01 月 16 日（日）　14 回　ヨハネのメッセージ

ルカの福音書　14 回

ヨハネのメッセージ

ルカ 3：7～20

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスの公生涯は、バプテスマのヨハネの登場から始まる。

②ヨハネは、「荒野で叫ぶ者の声」として、メシア到来のために人々の心を整えた。

(2) バプテスマのヨハネの奉仕（3：1～20）

①ヨハネの奉仕の始まり（1～6 節）

②ヨハネのメッセージ（7～18 節）

③ヨハネの奉仕の終わり（19～20 節）

2. アウトライン

(1) ヨハネのメッセージ（7～14 節）

(2) ヨハネの役割（15～18 節）

(3) ヨハネの奉仕の終わり（19～20 節）

3. 結論

(1) バプテスマのヨハネの奉仕の姿勢

(2) 紀元 1 世紀の宗教改革

(3) イエスの弟子のライフスタイル

ヨハネのメッセージについて学ぶ。

Ⅰ．ヨハネのメッセージ（7～14 節）

1. 7 節

Luk 3:7　ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしの子孫たち。だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。

(1) 群衆がヨハネからバプテスマを受けようとして出て来た。

①彼らは、霊的指導者たちの誤った教えに惑わされているかわいそうな民である。

②ヨハネが始めた「神の国運動」は、民族的運動となりつつある。

③しかし、彼らの中には、真の悔い改めに興味のない者たちがいた。

＊出エジプトの時も、多くの異邦人が混じり込んでいた。

④その彼らに、ヨハネは警告を発した。

(2)「まむしの子孫たち」

①イスラエルには 20 種類以上の毒蛇がいる。

②この比喩は、ほとんど「サタンの子孫たち」と言うに等しい。

③ヨハ 8：44

Joh 8:44　あなたがたは、悪魔である父から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと思っています。悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。彼のうちには真理がないからです。悪魔は、偽りを言うとき、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです。

④「だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか」

⑤「私はそんなことは教えていない」という意味である。

2. 8 節

Luk 3:8　それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。

(1) 洗礼によって自動的に罪が赦されるわけではない。

①悔い改めとは、心の方向転換である。

②真の悔い改めは、信仰の実によって証明される（ヤコブ書のテーマ)。

③ルカは、道徳的行為を重視している。

(2)「『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません」

①当時のユダヤ教は、アブラハムの子孫なら神の国に入れると教えていた。

②ヨハネは、ユダヤ人であることが救いの保証になるわけではないと教えた。

③ヨハ 8：39

Joh 8:39　彼らはイエスに答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行うはずです。

(3)「神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです」

①石は、異邦人を指す比ゆ的言葉である。

②当時、ユダヤ人は異邦人を見下していた。

③ユダヤ人はメシアを拒否するが、異邦人の中から多くの信者が出るようになる。

3. 9 節

Luk 3:9　斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒

されて、火に投げ込まれます。」

(1) これは、最後の裁きではなく、迫り来る裁きを描写する比ゆ的ことばである。

①ここでの裁きは、神の国が到来したことに関する裁きである。

②斧もすでに木の根元に置かれている。枯れ木は切り倒される。

③裁きが近いことを示す比ゆ的ことばである。

④この裁きは、紀元 70 年に成就した。

4. 10 節

Luk 3:10　群衆はヨハネに尋ねた。「それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか。」

(1) 群衆は心を刺され、具体的助言を求めた。

①悔い改めの表現として、何を為すべきか。

②これは、真剣な問いかけである。

③ヨハネは、各人の弱点に応じて、具体的助言を与える。

5. 11 節

Luk 3:11　ヨハネは答えた。「下着を二枚持っている人は、持っていない人に分けてあげなさい。食べ物を持っている人も同じようにしなさい。」

(1) 貪欲な者には、気前良くなるように勧めた。

②上着（ヒマティオン）ではなく、下着（キトン）が取り上げられている。

③下着を 2 枚持っている人は、2 枚いっしょに着ることが多かった。

④ヨハネは、より重要性の低い物に言及している。上着は当然である。

⑤ヨハネは、食事も含めて、隣人愛の実践を説いた。

6. 12～13 節

Luk 3:12　取税人たちもバプテスマを受けにやって来て、ヨハネに言った。「先生、私たちはどうすればよいのでしょうか。」

Luk 3:13　ヨハネは彼らに言った。「決められた以上には、何も取り立ててはいけません。」

(1) 取税人には、正直に仕事をするように勧めた。

①彼らは、入札によって、ローマから徴税権を得ていた。

②税額は前納であるため、それ以降の徴収が乱暴なものになる。

③特に通行税を徴収する人たちに問題があった。

④「決められたもの以上には、何も取り立ててはいけません」

6. 14 節

Luk 3:14　兵士たちもヨハネに尋ねた。「この私たちはどうすればよいのでしょうか。」ヨハネ

は言った。「だれからも、金を力ずくで奪ったり脅し取ったりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」

(1) 兵士たちには、満足するように勧めた。

①彼らは、ローマ兵ではなく、ユダヤ人兵士である。

②ヘロデ・アンティパスに雇われていた兵士たちであろう。

③彼らは、取税人の仕事が円滑に進むように、取税人の護衛をしていた。

④中には悪質な兵士がいて、脅迫によって金品を奪っていた。

⑤自分に与えられている力を、利得のために用いてはならない。

⑥与えられているもので満足する。

Ⅱ．ヨハネの役割（15～18 節）

1. 15 節

Luk 3:15　人々はキリストを待ち望んでいたので、みなヨハネのことを、もしかするとこの方がキリストではないか、と心の中で考えていた。

(1) ヨハネが語る神の国とメシアに関するメッセージが、民衆に大きな影響を与えた。

①ヨハネは、ダビデの家系ではない。祭司の息子なので、レビ族である。

②ヨハネは、メシアが行うはずの奇跡を行っていない。

③にもかかわらず、民衆はヨハネがメシアではないかと考えた。

2. 16～17 節

Luk 3:16　そこでヨハネは皆に向かって言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。

Luk 3:17　また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめ、麦を集めて倉に納められます。そして、殻を消えない火で焼き尽くされます。」

(1) ヨハネは、自分を奴隷以下の立場に置いた。

①ユダヤ人の奴隷は、主人に仕えるが、履き物のひもを解くことはしなかった。

②それは、異邦人の奴隷の役割であった。

③ラビは無料で教え、生徒はラビに献身的に仕えた。

④そのような生徒でも、ラビの履き物のひもを解くことはしなかった。

(2) ヨハネは、自分が施しているバプテスマとメシアのバプテスマを比較した。

①ヨハネのバプテスマは、水のバプテスマである。

②メシアのバプテスマは、聖霊と火のバプテスマである。

＊聖霊のバプテスマは、使 2：1～4 で成就した。

＊火のバプテスマは、再臨のメシアによる裁きである（マラ 3：2～3）

Mal 3:2　だれが、この方の来られる日に耐えられよう。／だれが、この方の現れるとき立っていられよう。／まことに、この方は、精錬する者の火、／布をさらす者の灰汁のようだ。

Mal 3:3　この方は、銀を精錬する者、／きよめる者として座に着き、／レビの子らをきよめて、／金や銀にするように、彼らを純粋にする。／彼らは【主】にとって、／義によるささげ物を献げる者となる。

(3) 聖霊のバプテスマの特徴

①キリストのみからだなる教会にバプテスマされる。

②聖霊の内住が始まる。

③御霊の賜物が与えられる。

3. 18 節

Luk 3:18　このようにヨハネは、ほかにも多くのことを勧めながら、人々に福音を伝えた。

(1) これは、ヨハネの奉仕のまとめである。

①福音とは、「神の国の福音」である。

②イエスの死と復活以降に伝えられる福音とは異なる。

③ルカは、「神の国は近づいた」というメッセージをここでは紹介していない。

④ルカ 4：43～44 で「神の国の福音」ということばが出てくる。

Luk 4:43　しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」

Luk 4:44　そしてユダヤの諸会堂で、宣教を続けられた。

Ⅲ. ヨハネの奉仕の終わり（19～20 節）

1. 19～20 節

Luk 3:19　しかし領主ヘロデは、兄弟の妻ヘロディアのことと、自分が行った悪事のすべてをヨハネに非難されたので、

Luk 3:20　すべての悪事にもう一つ悪事を加え、ヨハネを牢に閉じ込めた。

(1) ルカは、イエスの公生涯に入る前に、ヨハネの物語を終えている。

①ヨハネとイエスの対比が終わる。

②ヨハネの受難は、イエスの受難の予表となっている。

(2) ヨハネの厳しいことばに反発したヘロデ・アンティパスは、ヨハネを投獄した。

①長い説明は、マタ 14：4～12、マコ 6：17～29 にある。

②ヨハネの死については、先に行ってから説明される（9：7～9、19～20）。

(3) ヨハネの奉仕の期間は約 3 年である。

①1 年間は自由で、2 年間は獄中にあり、その後斬首された。

結論

1．バプテスマのヨハネの奉仕の姿勢

(1) ルカは一貫して、イエスが主であり、ヨハネが従であることを伝えた。

(2) ヨハネは一貫して、自分が「荒野で叫ぶ者の声」であることを認識していた。

①私ではなく、あの方が栄えるべきである。

②私のバプテスマよりも、あの方のバプテスマの方が優れている。

(3) 私たちが最も恐るべきこととは何か。

①神のために何もしない生活を送ること

②神の働きを妨害すること

2. 紀元 1 世紀の宗教改革

(1) ルカの福音書には、「パリサイ人やサドカイ人」への言及がない。

(2) 「『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません」

①これは、パリサイ的ユダヤ教を否定することばである。

②ユダヤ人たちはローマの支配下にあった。

③さらに、一般民衆は、パリサイ的ユダヤ教の支配下にあった。

④ヨハネが始めた神の国運動は、霊的革命である。

⑤形式的信仰から聖書信仰への回帰である。

⑥支配者層との対立が、ヨハネの死とメシアの死をもたらすことになる。

⑦メシアの死によって、この霊的革命は普遍的性格を持ち始める。

⑧キリスト教とは、普遍的ユダヤ教のことである。

3. イエスの弟子のライフスタイル

(1) ヨハネは、職場放棄や、荒野での生活を推奨したわけではない。

①置かれている生活の場で、メシアの弟子として生きよと励ました。

②クリスチャンのライフスタイルとは、この世でメシアの弟子として生きること。

(2) 信仰は、行いによって表現される。

ルカの福音書　15 回
イエスのバプテスマとイエスの系図
ルカ 3：21～38

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエスの公生涯は、バプテスマのヨハネの登場から始まる。
      ②ヨハネは、「荒野で叫ぶ者の声」として人々の心を整えた。
      ③イエスが登場し、ヨハネからバプテスマを受ける。
      ⑤次に、イエスの系図が紹介される。

2. アウトライン
   (1) イエスのバプテスマ（21～22 節）
   (2) イエスの系図（23～38 節）

3. 結論
   (1) イエスの祈りの生活
   (2) イエスの系図の神学的意味

イエスのバプテスマとイエスの系図について学ぶ。

Ⅰ．イエスのバプテスマ（21～22 節）

1. 21～22 節

Luk 3:21　さて、民がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマを受けられた。そして祈っておられると、天が開け、

Luk 3:22　聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。すると、天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」

(1) ここで、主役はヨハネからイエスに移行する。
   ①バプテスマがイエスの公生涯の始まりとなる。
   ②この時点では、すでに多くの人々がヨハネからバプテスマを受けていた。
   ③イエスのバプテスマは、ヨハネの奉仕のクライマックスである。
   ④並行箇所と比較すると、ルカの記録は非常に短い。
   ⑤ルカは、バプテスマそのものよりも、2 つの重要な点を伝えようとしている。
      ＊イエスに、聖霊の力が与えられた。
      ＊イエスに、父なる神の承認が与えられた。

(2) 聖霊が下ったことの意味

①イエスの上に聖霊が下り、メシアとしての奉仕に必要な力を与えた。

②クリスチャンも、聖霊によってクリスチャン生活に必要な力を受ける。

＊聖霊の内住

＊聖霊の賜物

(3) 父なる神からの声（バット・コル）

①ルカ 3：22（父なる神は 30 年間イエスを観察し、イエスを喜ばれた）

②ルカ 9：35（ペテロが 3 つの仮庵を立てることを提案した時）

③ヨハ 12：20～28（ギリシア人がイエスと面会することを求めた時）

④「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ」（22 節）

＊詩 2：7 とイザ 42：1 の合体

＊中間時代のユダヤ教は、この 2 つの箇所をメシア預言と理解していた。

⑤天からの声は、イエスにメシアとしての自己認識を与えた。

⑥メシアは、根源的な意味で、神の子である。

⑦メシアは、主のしもべである。

＊登場して最初に行ったのは、ヨハネからバプテスマを受けることである。

＊サタンは、イエスが本当に主のしもべであるかどうかを試す。

⑧クリスチャンの自己認識

＊神の子

＊キリストのしもべ

(4) ルカだけが、バプテスマの直後にイエスが祈ったことを記している。

①ルカは、人の子イエスを描こうとしている。父なる神への全き信頼。

Ⅱ．イエスの系図（23～38 節）

1. 系図の重要性

(1) 身元証明

①イスラエルに帰還しようとする人は、自らのユダヤ性を証明する必要がある。

②現代のユダヤ人は、系図を持っていない。

③ほとんどの場合、ラビの推薦状がその役割を果たす。

(2) 土地の所有権の証明

①部族、氏族、家族に応じて、土地が分割された。

(3) 祭司職の証明

①アロンの家系であることが、祭司の条件である。

②歴代誌の系図は、その視点が反映されたものである。

(4) 王位の証明

①イスラエルの王は、イスラエル人でなければならない（申 17：15)。

②ダビデ以降は、ダビデの家系でなければならない（2 サム 7：16)。

③ヘロデ大王は、エドム人であったために、正統性がない。

＊マタ 2：2～3

Mat 2:2　「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」

Mat 2:3　これを聞いてヘロデ王は動揺した。エルサレム中の人々も王と同じであった。

(5) メシア性の証明

①メシアは、アブラハムの子孫、ダビデの子孫でなければならない。

2. 23 節

Luk 3:23　イエスは、働きを始められたとき、およそ三十歳で、ヨセフの子と考えられていた。ヨセフはエリの子で、さかのぼると、

(1)「イエスは、」(And Jesus himself)

①イエスのご人格に注意を向けさせる代名詞(autos)(himself)が使われている。

(2)「働きを始められたとき、」

①訳文の比較

「教えを始められたとき、イエスはおよそ三十歳で、」（新改訳）

「イエスは、働きを始められたとき、およそ三十歳で、」（新改訳 2017）

「イエスが宣教を始められたときはおよそ三十歳であった」（新共同訳）

「イエスが宣教をはじめられたのは、年およそ三十歳の時であって、」（口語訳）

②直訳は、「始められたとき、」である。

③イエスはおよそ 30 歳でメシアとしての奉仕を開始された。

④ルカは、イエスの年齢に幅を持たせている。

⑤「30 歳」は、祭司としての働きを開始する年齢である。

(3) ルカの系図は、イエスの母マリアの系図である。

①ルカ 1～2 章は、ヨセフよりもマリアが主役である。

②女性の名は通常系図には出ないので、マリアの夫ヨセフの名が登場している。
③この系図は、イエスから始まり、アブラハムを経て、最後はアダムに至る。
④ルカの福音書は、異邦人のために書かれた福音書である。
⑤ルカは、イエスが全人類の救い主であることを示そうとしている。

(4)「ヨセフの子と考えられていた。ヨセフはエリの子で、さかのぼると、」
①ルカの福音書の読者は、ヨセフがイエスの義父であることをすでに知っている。
②原文は、「son of Joseph」である。定冠詞の「the」が付いていない。
③それ以降は、「the（son）of Eli」と定冠詞の「the」が付いている。
④学者の説明では、「定冠詞」がない場合は、系図から外れている。
⑤エリは、ヨセフの実父ではなく、義理の父である。つまり、マリアの父である。
⑥イエスは、肉体的にはマリアの子である。
⑦イエスは、肉体的にアブラハムの子孫、ダビデの子孫である。

3. 24～38 節

(1) マタイの系図
①イエスの系図を 3 つに区分し、記憶しやすいようにした。
②区切りは、ダビデ（人物）とバビロン捕囚（出来事）である。
③14×3＝42 であるが、登場するのは 41 人である。
④ダビデの名が、第一区分の最後と、第二区分の最初に出てくる。
⑤系図の中に省略がある。旧約聖書では一般的。

(2) ルカの系図
①イエスからアダムまで、77 人が登場する。
②ルカは銘記していないが、7 人×11 区分という編集意図がある。
③上から順に見てみると、区分の終わりか初めに重要な人物が登場している。
④アブラハムは、3 区分目の最後に登場している。
⑤ダビデは、5 区分目の最後に登場している。
⑥ルカもまた、既存の系図を利用して、自らの意図に沿って編集した。

結論

1. イエスの祈りの生活

＊イエスの祈りの生活は、ルカの福音書の主要テーマである。

(1) ルカ 3：21（バプテスマを受けたとき）
(2) ルカ 5：16（名声が広まったとき）

Luk 5:16　だが、イエスご自身は寂しいところに退いて祈っておられた。

(3) ルカ 6：12（12 使徒の選抜のとき）

Luk 6:12　そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。

(4) ルカ 9：18（弟子たちから信仰告白を引き出す前に）

Luk 9:18　さて、イエスが一人で祈っておられたとき、弟子たちも一緒にいた。イエスは彼らにお尋ねになった。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」

(5) ルカ 9：28～29（変貌山にて）

Luk 9:28　これらのことを教えてから八日ほどして、イエスはペテロとヨハネとヤコブを連れて、祈るために山に登られた。

Luk 9:29　祈っておられると、その御顔の様子が変わり、その衣は白く光り輝いた。

(6) ルカ 11：1（主の祈りを教える前に）

Luk 11:1　さて、イエスはある場所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

(7) ルカ 22：31～32（ペテロのために）

Luk 22:31　シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。

Luk 22:32　しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

(8) ルカ 22：40～41（ゲツセマネの園にて）

Luk 22:40　いつもの場所に来ると、イエスは彼らに、「誘惑に陥らないように祈っていなさい」と言われた。

Luk 22:41　そして、ご自分は弟子たちから離れて、石を投げて届くほどのところに行き、ひざまずいて祈られた。

2. ルカの系図の神学的意味

(1) ルカの系図は、イエスからアダムまで遡っている。

(2) ルカの系図は、イエス・キリストが全人類の救い主であることを示している。

(3) 逆に見ると、アダムが初めであり、イエスが最後である。

①最初のアダムは、不従順なアダム。

②最後のアダムは、従順なアダム。

(4) クリスチャンは、最初のアダムから分離し、最後のアダムにつながった。

ルカの福音書　16 回
荒野の誘惑
ルカ 4：1～13

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエスは、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。
      ②次に、イエスの系図が紹介された（挿入句）。
      ③バプテスマによって、メシアの本質が明らかになった。
         ＊メシアは、神の子、主のしもべである。
      ④バプテスマと誘惑は、連続した出来事である。
      ⑤イエスは聖霊の力によって、父なる神の御心を行い、悪魔に勝利される。

2. アウトライン
   (1) 聖霊の導き（1～2 節）
   (2) 第 1 の誘惑（3～4 節）
   (3) 第 2 の誘惑（5～8 節）
   (4) 第 3 の誘惑（9～12 節）
   (5) イエスから離れる悪魔（13 節）

3. 結論
   (1) イエスの誘惑とアダムの罪の関係
   (2) イエスの誘惑とイスラエルの罪の関係
   (3) イエスの誘惑と私たちの罪の関係

イエスが受けた誘惑の意味について学ぶ。

Ⅰ．聖霊の導き（1～2 節）

1. 1～2 節 a

Luk 4:1　さて、イエスは聖霊に満ちてヨルダンから帰られた。そして御霊によって荒野に導かれ、

Luk 4:2a　四十日間、悪魔の試みを受けられた。

(1) 3：22 で聖霊がイエスの上に下った。
   ①イエスは聖霊に支配されて、聖霊の力によって、メシアとしての働きをする。
   ②興味深いことに、聖霊がイエスを荒野に導いた。
   ③ヘブ 5：8

Heb 5:8　キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、

④荒野は神の声を聴く場所であるが、そこで悪魔の声が聞こえてきた。

＊伝統的に、誘惑の場所はエリコを見下ろす山であると言われている。

⑤クリスチャンにとって、荒野の体験は霊的成長のために必要なものである。

(3)「四十日間、悪魔の試みを受けられた」

①悪魔は、ギリシア語でディアボロス、ヘブル語で、サタナス。

＊ともに、訴える者という意味である。

②試みは、ギリシア語でペイラゾウである。

＊誘惑する（tempt）と試す（test）という 2 つの意味がある。

③悪魔の試みは、40 日間にわたり継続した。

2. 2 節 b

Luk 4:2b　その間イエスは何も食べず、その期間が終わると空腹を覚えられた。

(1) 旧約聖書では、40 日間というモチーフが随所に現れている。

①大雨が降った日数（創 7：4）

②モーセがシナイ山で過ごした日数（出 24：18）

③エリヤが神の山ホレブまで歩いた日数（1 列 19：8）

④ニネベが滅びるまでの日数（ヨナ 3：4）

⑤イスラエルが荒野を放浪した年数（40 年）

⑥イエスの試みの期間は、40 日間であった。

⑦イエスは、イスラエルの民の失敗を償うために、申命記から引用する。

⑧イスラエルの民は荒野でマナを食べたが、イエスには食べ物がなかった。

(2) 40 日間が終わると、悪魔の誘惑はさらに激しくなった。

①イエスは空腹を覚えた。

②そこに悪魔が付け込んで来た。

Ⅱ．第 1 の誘惑（3～4 節）

1. 3 節

Luk 4:3　そこで、悪魔はイエスに言った。「あなたが神の子なら、この石に、パンになるように命じなさい。」

(1)「あなたが神の子なら」は、「あなたは神の子なのだから」という意味である。

①イエスが神の子として、父なる神に従順に歩むかどうかを試している。

(2) この誘惑の内容

①イエスには、石をパンに変える力はある。

②その力を、自らを満足させるために用いよという誘惑である。

③父の御心に従うのではなく、父から独立して行動せよという誘惑である。

＊父の御心は、イエスが荒野で空腹になることであった。

＊父の御心は、イエスが受難の道を歩むことであった。

2. 4 節

Luk 4:4　イエスは悪魔に答えられた。「『人はパンだけで生きるのではない』と書いてある。」

(1) 申 8：3 からの引用

①イスラエルの民は、荒野でマナを食べて生き延びた。

②マナは、神のことば（約束）によって与えられた。

③それゆえ、マナを食べる者は神のことばを食べているのである。

＊神のことばを食べるとは、神の約束に信頼することである。

④イエスは、パンを食べなくても、荒野で死ぬことはないと知っていた。

⑤と同時に、神のことばに信頼しなければ霊的に死ぬことも知っていた。

⑥それゆえイエスは、神のことばに自らを委ねたのである。

(2) イエスは、聖句を引用することによって、悪魔の誘惑に勝利した。

①聖句を自分に適用することが、霊的戦いに勝利する秘訣である。

Ⅲ. 第 2 の誘惑（5～8 節）

1. 5～7 節

Luk 4:5　すると悪魔はイエスを高いところに連れて行き、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せて、

Luk 4:6　こう言った。「このような、国々の権力と栄光をすべてあなたにあげよう。それは私に任されていて、だれでも私が望む人にあげるのだから。

Luk 4:7　だから、もしあなたが私の前にひれ伏すなら、すべてがあなたのものとなる。」

(1)「高いところ」とは、エリコを見下ろす場所であろう。

①エリコには、オアシスの町の栄華があった。特にバルサム樹が重要であった。

②悪魔は、エリコ以外にも、幻によって世界のすべての国々を見せた。

(2)「もしあなたが私の前にひれ伏すなら、すべてがあなたのものとなる」

①悪魔がこう言えるのは、彼がこの世の支配者だからである。

②2 コリ 4：4

2Co 4:4　彼らの場合は、この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです。

③ヨハ 12：31

Joh 12:31　今、この世に対するさばきが行われ、今、この世を支配する者が追い出されます。

④悪魔を拝むことが、この世の栄華を得るための条件である。

⑤この誘惑は、十字架を抜きにした救いの道を提案するものである。

2. 8 節

Luk 4:8　イエスは悪魔に答えられた。「『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。」

(1) イエスは、申 6：13 を引用された。

①これは、モーセがイスラエルの民に与えた命令である。

②約束の地で安定した生活に入っても、主を礼拝することを忘れてはならない。

③神の子イエスは、神の民イスラエルに語られた命令を、自分に適用された。

(2) イエスは、やがて御国の王となるお方である。

①王となる方法は、悪魔礼拝ではなく、父なる神への信頼である。

Ⅳ. 第 3 の誘惑（9～12 節）

1. 9～11 節

Luk 4:9　また、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、こう言った。「あなたが神の子なら、ここから下に身を投げなさい。

Luk 4:10　『神は、あなたのために御使いたちに命じて、／あなたを守られる。

Luk 4:11　彼らは、その両手にあなたをのせ、／あなたの足が石に打ち当たらないようにする』／と書いてあるから。」

(1) ルカは、これを第 3 の誘惑としている。

①マタイは、これを第 2 の誘惑としている。

②ルカは、最後にエルサレムの神殿の場面をもってくる。

＊イエスは、エルサレムで悪魔に勝利される。

＊イエスは、エルサレムで十字架に付けられる。

＊エルサレムから福音が全世界に拡がっていく。

③マタイは、御国に関する誘惑を最後にもってくる。

＊マタイが想定する読者は、ユダヤ人たちである。

(2)「神殿の屋根の端に立たせて」

①神殿の南東の角。ケデロンの谷を眼下に見る場所。
②悪魔は、そこから下に身を投げるように誘惑する。
③奇跡を見せれば、人々はあなたをメシアとして受け入れるだろうという誘惑。
④つまり、十字架抜きで救いを提供せよという誘惑である。

(3) 悪魔は、詩篇 91 篇 11～12 節を引用した。
①「あなたの足が石に打ち当たらないようにする」
＊悪魔は、神殿の頂から飛び降りても石に当たらないという適用をしている。
②「あなたのすべての道で」を無視している。
＊詩篇 91 篇は、神の御心の道を歩む人への守りの約束である。

2. 12 節

Luk 4:12　するとイエスは答えられた。「『あなたの神である主を試みてはならない』と言われている。」

(1) これは、申命記 6 章 16 節の引用である。
①荒野の旅で、水がなくなった時に、民は【主】に向かってつぶやいた。
②出 17：1～7 の出来事

(2) ここでも、イエスは聖句の引用によって勝利された。
①受難のしもべとして、十字架への道を歩むことが、神の御心である。

V．イエスから離れる悪魔（13 節）

1. 13 節

Luk 4:13　悪魔はあらゆる試みを終えると、しばらくの間イエスから離れた。

(1) 悪魔は、一時的にイエスを離れた。
①イエスの公生涯が次の段階に入ったときに、再度登場する。
②マタ 16：23

Mat 16:23　しかし、イエスは振り向いてペテロに言われた。「下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

結論

1. イエスの誘惑とアダムの罪の関係

(1) イエスは、アダムの失敗を償った。
(2) アダムが受けた 3 つの誘惑
①食べ物に関係した誘惑（ルカの 1 番目の誘惑）

Gen 3:1　さて蛇は、神である【主】が造られた野の生き物のうちで、ほかのどれよりも賢かった。蛇は女に言った。「園の木のどれからも食べてはならないと、神は本当に言われたのですか。」

②死ぬことはないという誘惑（ルカの 3 番目の誘惑）

Gen 3:4　すると、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。

③力が手に入るという誘惑（ルカの 2 番目の誘惑）

Gen 3:5　それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです。」

(3) イエスは、3 つの誘惑に打ち勝ち、アダムの失敗を償った。

2. イエスの誘惑とイスラエルの罪の関係

(1) イエスは、イスラエルの失敗を償った。

(2) イスラエルは、荒野で 40 年間試された。

①期間に関しては、40 年と 40 日の対比がある。

②イエスの聖句引用は、すべて申命記からのものである。

③申命記は、神とイスラエルの民の契約の書である。

(3) イエスは、40 日間の荒野の誘惑に打ち勝ち、イスラエルの失敗を償った。

3. イエスの誘惑と私たちの罪の関係

(1) イエスは、私たちの失敗を償った。

(2) 人類一般が受ける誘惑（1 ヨハ 2：16）

1Jn 2:16　すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。

①肉の欲（食欲、性欲など）

②目の欲（貪欲な性質）（ルカの 2 番目の誘惑）

③暮らし向きの自慢（注目されたいという欲）（ルカの 3 番目の誘惑）

(3) 私たちが犯す失敗を、メシアが補った。

(4) 私たちへの教訓

①誘惑のタイミングは、バプテスマの直後である。

②神は、誘惑が起こることを許される。

③クリスチャンは、神のことば（約束）を食して生きる。

④義認は、イエス・キリストを信じた瞬間に起こる。

⑤しかし、聖化には時間がかかる。

⑥神は、私たちを完成に導くために、私たちを試みられる。

＊私たちは、神の子であり、神のしもべである。

ルカの福音書　17 回
ナザレでの伝道
ルカ 4：14～30

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエスは、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けた。
         ＊イエスの上に聖霊が下った。
      ②聖霊は、イエスを荒野に導いた。
         ＊イエスは聖霊の力によって、悪魔に勝利した。
      ③イエスは、聖霊の力によってガリラヤ伝道を開始する。
         ＊ガリラヤ伝道の前に、短期間のユダヤ伝道があった（ヨハ 1～4 章)。
      ④ガリラヤ伝道の 2 つの目的
         ＊メシア性を証明する。
         ＊弟子たちを招く。

2. アウトライン
   (1) ガリラヤ伝道のイントロダクション（14～15 節）
   (2) ナザレでの伝道（16～30 節）
      ①ナザレの会堂での説教（16～21 節）
      ②ナザレの人々の応答（22～30 節）

3. 結論
   (1) ナザレでの伝道の意味
   (2) ルカ 4：21 と 24：44 の関係

ナザレでの宣教の意味について学ぶ。

Ⅰ．ガリラヤ伝道のイントロダクション（14～15 節）

1. 14 節

Luk 4:14　イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた。すると、その評判が周辺一帯に広まった。

(1) 御霊の力は、イエスの奉仕の原動力であった。
   ①ガリラヤ伝道は、御霊の力によって実行に移される。
      ＊ルカは、4～6 章で、そのことを証明する。
   ②イエスは、御自身の神性ではなく、聖霊の導きに自らを委ねた。

＊クリスチャンもここから教訓を学ぶことができる。

③聖霊の力による伝道というモチーフは、使徒の働きの中でも継続される。

2. 15 節

Luk 4:15　イエスは彼らの会堂で教え、すべての人に称賛された。

(1) イエスは、会堂から会堂へと巡回された。

①当初、会堂の扉は大きく開かれていた。

②イエスに対する最初の応答は、積極的なものであった。

③イエスは有名になり、すべての人に称賛された。

Ⅱ．ナザレの会堂での説教（16～21 節）

1. 16 節

Luk 4:16　それからイエスはご自分が育ったナザレに行き、いつもしているとおり安息日に会堂に入り、朗読しようとして立たれた。

(1) イエスはナザレを複数回訪問している。

①この訪問と、マタ 13：53～58 とマコ 6：1～6 の訪問とは異なる。

②この訪問が、最初のものである。

(2) ルカは、ナザレがイエスの育った村だという情報を伝えている。

①ルカ 2：51 に、12 歳のイエスがナザレに帰り、両親に仕えたと書かれている。

②イエスは、安息日に会堂に行くことを習慣としていた。

③会堂は、捕囚期後、離散の地だけでなく、イスラエルの地にも広がった。

＊会堂と神殿は、別のものである。

④律法を守るユダヤ人なら、安息日には会堂に行った。

(3)「朗読しようとして立たれた」

①トーラーの朗読

＊その週の朗読箇所が決まっている（数章を部分に分け、月、木、土に朗読）。

＊1 年のサイクルが終わると、シムハット・トーラーという祝いをする。

＊仮庵の祭りの最終日がそれに当たる。

＊紀元 1 世紀の頃は、3 年サイクルで朗読していた。

②預言書の朗読

＊その日のトーラーの箇所と関連した箇所

＊ハフタラーという（結論という意味）。

③朗読の後、奨励（説教）が語られる。

＊朗読する時は、立って朗読した。神のことばに敬意を表するため。

＊奨励の時は、座って語った。

④朗読も、奨励も、会堂管理者の判断で行われた。

＊使徒 13：14～15 では、パウロとバルナバが会堂管理者から招かれている。

⑤この安息日では、会堂管理者がイエスを前に招いた。

＊人々の間に期待感があった。

2. 17 節

Luk 4:17　すると、預言者イザヤの書が手渡されたので、その巻物を開いて、こう書いてある箇所に目を留められた。

(1) これは、ハフタラー（預言書）の朗読である。

①この日は、イザヤ書の巻物が手渡された。

②死海写本では、イザヤ書の写本は、1 本の巻物になっている。

(2) イエスは、その安息日に予定されていた朗読箇所を読まれたのか。

①もしそうなら、ここには摂理的な導きがある。

②自らイザヤ書の特定の箇所を選んで、そこを読まれた可能性が高い。

3. 18～19 節

Luk 4:18　「主の霊がわたしの上にある。／貧しい人に良い知らせを伝えるため、／主はわたしに油を注ぎ、／わたしを遣わされた。／捕らわれ人には解放を、／目の見えない人には目の開かれることを告げ、／虐げられている人を自由の身とし、

Luk 4:19　主の恵みの年を告げるために。」

(1) イエスは、イザ 61：1～2a を朗読された。

①イエスは、2 節 a まで読んで、そこでストップされた。

②この箇所は、メシアの奉仕に関する預言である。

＊メシアの上に主の霊がある。

＊メシアは、貧しい人（下層階級の人たち）に良い知らせを伝える。

＊メシアは、預言的宣言を行う（目の見えない人とは、霊的に無知な人）。

＊メシアは、主の恵みの年を告げる。

・ヨベルの年への言及であるが、最終的には、メシア的王国で成就する。

・これは、ユダヤ人も異邦人も恵みに与るという預言である。

(2) イエスは、2 節 b の「われらの神の復讐の日を告げ、」を読まなかった。

①これは患難期の預言である。

②初臨のメシアの奉仕の特徴は恵みであり、再臨のメシアの特徴は裁きである。
③ローマの圧政に苦しむナザレの人たちには、不満が残った。

3. 20～21 節

Luk 4:20　イエスは巻物を巻き、係りの者に渡して座られた。会堂にいた皆の目はイエスに注がれていた。

Luk 4:21　イエスは人々に向かって話し始められた。「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」

(1) 奨励を語る時は、座るのが当時の習慣である。
①出席者は、イエスに注目した。
②イエスが何を語るか、大きな期待があった。
③イエスは、最初のことばの重要性を知っていた。
④ここは、講解メッセージにおいて、最初に適用を語るようなものである。

(2) イエス自身によるメシア宣言
①イエスは、ユダヤ人たちが長年待ち望んできたメシアである。
②イエスは、イザヤが預言していたメシアである。
③そのメシアが、今ナザレの会堂を訪問し、旧知の人々の前で語っている。
④「今日」ということばに強調点がある。
⑤今、待ち望んでいた「終末の時代」が到来した。

Ⅲ. ナザレの人々の応答（22～30 節）

1. 22 節

Luk 4:22　人々はみなイエスをほめ、その口から出て来る恵みのことばに驚いて、「この人はヨセフの子ではないか」と言った。

(1) 積極的反応があった。
①イエスは、噂通り、あるいは、それ以上のお方である。
②恵みのことばは、予想をはるかに超えるものである。

(2) 消極的反応もあった。
①「この人は、ヨセフの子ではないか」
②「いったいどうなってんだ。 ただのヨセフのせがれじゃないか」(LB)
③これは、同意を求める質問の形である。

2. 23～24 節

Luk 4:23　そこでイエスは彼らに言われた。「きっとあなたがたは、『医者よ、自分を治せ』ということわざを引いて、『カペナウムで行われたと聞いていることを、あなたの郷里のここでもしてくれ』と言うでしょう。」
Luk 4:24　そしてこう言われた。「まことに、あなたがたに言います。預言者はだれも、自分の郷里では歓迎されません。

(1) イエスはカペナウムで奉仕をされた。
①その噂が、ナザレにまで伝わっていた。

(2)「医者よ、自分を治せ」というたとえの意味
①名医であることを証明するために、先ず自分の病を癒してみろ。
②自分がメシアだと言うなら、カペナウムで行われたのと同様の奇跡を行え。
③自分の郷里で先ず奇跡を行うべきではないか。そうしたら信じてやる。

(3)「まことに、あなたがたに言います」
①重要な内容を、権威をもって伝える際の定型句である。
②預言者はだれも、自分の郷里では歓迎されません。
③イエスは、ナザレ以外の場所では大いに尊敬された。
④ナザレの人々の問題は、プライドである。

3. 25～26 節

Luk 4:25　まことに、あなたがたに言います。エリヤの時代に、イスラエルに多くのやもめがいました。三年六か月の間、天が閉じられ、大飢饉が全地に起こったとき、
Luk 4:26　そのやもめたちのだれのところにもエリヤは遣わされず、シドンのツァレファテにいた、一人のやもめの女にだけ遣わされました。

(1) エリヤの例
①1 列 17～18 章
②「シドンのツァレファテにいた、一人のやもめの女」とは、異邦人の女である。
③イスラエル人で助けが必要な人が多くいたが、神はエリヤを異邦人に遣わした。

4. 27 節

Luk 4:27　また、預言者エリシャのときには、イスラエルにはツァラアトに冒された人が多くいましたが、その中のだれもきよめられることはなく、シリア人ナアマンだけがきよめられました。」

(1) エリシャの例
①2 列 5 章

②「ツァラアト」とは、重い皮膚病のことである。
③シリア人ナアマン（異邦人の将軍）だけがきよめられた。

(2) 2 つの事例の共通点
①当時、イスラエルの民は不信仰の状態にあった。
②そこで神は、イスラエルではなく、異邦人を祝福された。
③異邦人の救いというルカの福音書のテーマが示唆されている。

5. 28～30 節

Luk 4:28　これを聞くと、会堂にいた人たちはみな憤りに満たされ、
Luk 4:29　立ち上がってイエスを町の外に追い出した。そして町が建っていた丘の崖の縁まで連れて行き、そこから突き落とそうとした。
Luk 4:30　しかし、イエスは彼らのただ中を通り抜けて、去って行かれた。

(1) ナザレの人たちは、激怒した。
①自分たちのことを言われている。
②ユダヤ人よりも異邦人が優遇されるのは、許せない。
③会堂にいた人たちがみな立ち上がり、イエスを町の外に追い出した。
④丘の崖の縁から、イエスを投げ落とそうとした。
＊今も、「突き落としの崖」と言われる場所がある。

(2) イエスの脱出
①逃れた方法でなく、死ななかったという事実の方が重要である。
②十字架の時がまだ来ていなかった。
③また、イエスが死ぬ場所は、ナザレではない。

結論

1. ナザレでの伝道の意味

(1) ナザレで起こったことは、イスラエル全体でも起こる。
①イエスに起こることの「ドレスリハーサル」である。
②ナザレは、2 度にわたってイエスを拒否する。
③「突き落としの崖」の事件は、イエスの死を予感させる。

(2) ナザレで起こったことは、メシア預言の成就である。
①イザ 61：1～2a

(3) ナザレで起こったことは、イエスの公生涯のパラダイムとなっている。
①イスラエルはイエスをメシアとして受け入れない。

②そこで、異邦人が救いに招かれる。

＊これは、教会時代に成就する。

＊メシア的王国の成就は、再臨以降に持ち越された。

2. ルカ 4：21 と 24：44 の関係

(1) ルカ 4：21

Luk 4:21　イエスは人々に向かって話し始められた。「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」

(2) ルカ 24：44

Luk 24:44　そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」

(3) ルカの意図

①4：21 は、公生涯の始めに、イエスが預言されていたメシアであることを示す。

②24：44 は、公生涯の終わりに、イエスが約束のメシアであることを示す。

③ルカは、公生涯全体が、メシア預言の成就であることを示そうとしている。

ルカの福音書　18 回
悪霊につかれた人の癒し
ルカ 4：31～37

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①悪魔に勝利したイエスは、聖霊の力によってガリラヤ伝道を開始する。
         ＊ガリラヤ伝道の前に、短期間のユダヤ伝道があった（ヨハ 1～4 章)。
      ②イエスは、ナザレを訪問した。
      ③ナザレの人々は、イエスを信じなかった。
      ④カペナウムを拠点とした奉仕が始まる。
         ＊この状態が､十字架に付く半年前に､ユダヤに向かって出発するまで続く。
         ＊約 2 年半、ガリラヤを巡回したり、エルサレムに上ったりした。

2. アウトライン
   (1) カペナウムでの奉仕（31～32 節）
   (2) 悪霊との対決（33～35 節）
   (3) うわさの拡がり（36～37 節）

3. 結論
   (1) 今日における悪霊の働き
   (2) イエスのメッセージの特徴

悪霊の追い出しについて学ぶ。

Ⅰ．カペナウムでの奉仕（31～32 節）

1. 31 節

Luk 4:31　それからイエスは、ガリラヤの町カペナウムに下られた。そして安息日には人々を教えておられた。

(1) ナザレ（標高 360m）からカペナウム（標高マイナス 200m）までは下りである。
   ①カペナウムは、ガリラヤの町である（異邦人読者のための情報)。
   ②漁業の町で、ペテロとアンデレのホームタウンである。
   ③交通の要衝の地（国境の町）であるため、異邦人たちの往来があった。
   ④国際都市であるため、新しい教えに対してオープンであった。
   ⑤地理的にも、政治的にも、文化的にも、伝道の拠点にふさわしい町である。

(2) イザヤ書 9 章 1～2 節の預言の成就

①この視点は、マタイが取り上げている。

②イエスは、「死の地と死の陰にすわっていた人々」に奉仕をした。

(3) イエスは、安息日に会堂に行き、人々を教えることを習慣としていた。

①イエス時代のカペナウムの人口は、千人前後と推定される。

②会堂の遺跡が、1900 年代初頭に発掘された。

③玄武岩の土台の上に、紀元 4 世紀の白色石灰石の会堂が建てられている。

④会堂の規模は、縦横 20 メールで、2 階建てである。

⑤会堂での礼拝風景に関しては、すでにナザレの会堂での例を見た。

＊トーラーと預言書の朗読の後で、奨励のメッセージが語られる。

2. 32 節

Luk 4:32　人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである。

(1) 人々は、イエスの教えに非常に驚いた。

①律法学者の教え

＊過去のラビたちの教えを引用し、その上に自分の教えを付け加えた。

②イエスの教え

＊イエスは、預言者として、権威ある神のことばをそのまま語った。

＊私たちが伝道する際のヒントがここにある。

③ナザレの人々とカペナウムの人々の対比は、鮮明である。

＊不信仰と信仰の対比である。

(2) イエスの権威は、一連の奇跡によって可視化される。

①最初に出てくるのが、悪霊の追い出しである。

②次に出てくるのが、ペテロの姑の癒しである。

II．悪霊との対決（33～35 節）

1. 33～34 節

Luk 4:33　そこの会堂に、汚れた悪霊につかれた人がいた。彼は大声で叫んだ。

Luk 4:34　「ああ、ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」

(1) 悪霊は、人々よりも先に、イエスがメシアであることを認識した。

①悪霊は、汚れた悪霊である。

＊その霊は、悪意を持って行動する。それゆえ悪霊である。

＊その霊は、汚れており、汚れをまき散らす。それゆえ汚れた霊である。

②聖霊は、聖い霊である。

＊聖霊は、善意を持って行動する。それゆえ慰め主である。

＊聖霊は、聖い霊である。それゆえ、信者を聖化に導く。

(2) 悪霊につかれた人が、大声で叫んだ。

①叫んでいるのは、その人の内側に住みついている悪霊である。

②福音書では、悪霊につかれた人は、大声で叫ぶことが多い。

(3) 叫んだ内容

①**「ああ」**（Ha！）は、驚きのことばであるが、憤りの意味を含んでいる。

②悪霊は、**「ナザレの人イエス」**と呼んでいる。

＊悪霊を追い出す際には、その悪霊の名を呼んで、支配権を確立した。

＊悪霊は、イエスに対して支配権を確立しようとした。

③**「私たちと何の関係があるのですか」**

＊どうして私たちの邪魔をするのですか、という意味である。

＊悪霊は、「私たち」と言った。

④**「私たちを滅ぼしに来たのですか」**

＊再び、「私たち」と言った。

＊悪霊の集団は、イエスがいかに危険な存在であるかを知っていた。

＊荒野の誘惑に失敗した悪魔が、悪霊の集団に情報を伝達したと思われる。

＊公生涯の間、光の国と闇の国の戦いは継続する。

＊イエスは悪霊を制する権威を使徒たちに与えた（9：1～2、10：9～10、17）。

⑤**「私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です」**

＊「聖者（Holy One）」とは、神である。

＊「神の聖者」（Holy One of God）とは、神の使者という意味である。

＊イエスは、聖霊によって力を受け、特別な使命のために遣わされている。

＊悪霊は、イエスの権威の源を見抜いている。

＊悪霊は、知識は持っているが、信仰は持っていない。

2. 35 節

Luk 4:35　イエスは彼を叱って、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。すると悪霊は、その人を人々の真ん中に投げ倒し、何の害も与えることなくその人から出て行った。

(1) イエスが叱っているのは、悪霊である。

「イエスはこれをしかって、『黙れ、この人から出て行け』と言われた」（口語訳）

①イエスは、悪霊の証しを必要としない。

＊悪霊に、「あなたがどなたなのかを知っている」とは言わせない。

＊信者と未信者のイエスに関する知識は、大いに異なる。

②イエスは、悪霊の証言を認めない。

＊イエスに興味があるかのような印象を与えてしまう。

(2) イエスは、ことばだけで悪霊を追い出した。

①「黙れ」と「この人から出て行け」

②悪霊は、その人を人々の真ん中に投げ倒して出て行った。

③その人は、なんの害も受けなかった。

Ⅲ．うわさの拡がり（36～37 節）

1．36～37 節

Luk 4:36　人々はみな驚いて、互いに言った。「このことばは何なのだろうか。権威と力をもって命じられると、汚れた霊が出て行くとは。」

Luk 4:37　こうしてイエスのうわさは、周辺の地域のいたるところに広まっていった。

(1) 人々はみな驚いた。

①イエスは、通常の悪霊の追い出しとは異なった方法で、悪霊を追い出した。

②命じるだけで、悪霊は従う。

(2) 人々は、イエスの教えが権威あるものだと認めた。

①権威ある教えと悪霊の追い出しは、イエスのメシア性を証明するものとなった。

②イエスの評判が、短時間の内にガリラヤ全地に広がるのも当然のことである。

結論

1．今日における悪霊の働き

(1) 悪霊につかれた状態

「ある人の中に悪霊が住み、ある種の精神的錯乱や肉体的不調を用いて、その人を直接的に支配している状態のことである」

(2) 2 種類の区別が必要である。

①悪霊につかれているのか、精神的原因によるものなのか。

②悪霊につかれているのか、悪霊の攻撃なのか（外からのもの）。

(3) 信者は悪霊に支配されない。

①悪霊の所有物にはならない（完全に支配されることはない）。

②しかし、悪霊が一時的に信者を支配することはある。

＊使５：3

Act 5:3　すると、ペテロは言った。「アナニア。なぜあなたはサタンに心を奪われて聖霊を欺き、地所の代金の一部を自分のために取っておいたのか。

＊エペ４：27

Eph 4:27　悪魔に機会を与えないようにしなさい。

＊機会とは、場所、上陸地点のことである。

③信者と未信者の違いは、支配の度合いの違いである。

＊信者には２つの性質がある。

＊聖霊は新しい性質の内に宿り、悪霊は罪の性質の内に宿る。

(4) 福音書の記述は、現代の悪霊の活動を判断するための規準ではない。

①闇の王国は、イスラエルの地に勢力を集中させていた。

2. イエスのメッセージの特徴

(1) 愛―イエスは、愛をもって語った。

①律法学者たちは、往々にして、個人的な利得を求めていた。

②イエスは、聴衆の最善を求めた。

(2) いのち―イエスは、人生の重要テーマについて語った。

①律法学者たちは、些細なことを重視した。

②イエスは、生死に関わるテーマを取り上げた。

(3) 動き―イエスは、ゴールに向かって語った。

①律法学者たちは、荒野をさ迷うようなメッセージを語った。

＊テト１：14

Tit 1:14　ユダヤ人の作り話や、真理に背を向けている人たちの戒めに、心を奪われないようにさせなさい。

②イエスは、人々の心を父なる神に向かわせるメッセージを語った。

(4) 絵―イエスは、たとえを用いて語った。

①律法学者たちは、退屈な教えを語った。

②イエスは、理解しやすい方法で霊的真理を語った。

(5) お墨付き（authority）―イエスは、父なる神の権威に基づいて語った。

①律法学者の権威は、前の時代のラビたちに依存している。

②イエスは、父なる神から受けたことばを伝えた。

③イエスがメシアとしての権威を持っていることが証明された。

＊悪霊に対する権威

＊病に対する権威

ルカの福音書　19 回
シモンの姑の癒し
ルカ 4：38～44

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①悪魔の誘惑に勝ったイエスは、聖霊の力によってガリラヤ伝道を開始した。
      ②ナザレを訪問したが、ナザレの人々はイエスを信じなかった。
      ③イエスはカペナウムに下り、そこを宣教の拠点とした。
         ＊約 2 年半、ガリラヤを巡回したり、エルサレムに上ったりした。
      ④イエスの権威は、悪霊の追い出しと病の癒しによって証明される。

   (2) ルカは、交差対句法を用いている。
      ①悪霊の追い出し（31～37 節）
      ②病の癒し（38～39 節）
      ③病の癒し（40 節）
      ④悪霊の追い出し（41 節）

2. アウトライン
   (1) シモンの姑の癒し（38～39 節）
   (2) 多くの病人の癒し（40～41 節）
   (3) 宣教の拡がり（42～44 節）

3. 結論
   (1) シモンについて
   (2) シモンの姑について

イエスの権威について学ぶ。

Ⅰ．シモンの姑の癒し（38～39 節）

1. 38 節

Luk 4:38　イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家に入られた。シモンの姑がひどい熱で苦しんでいたので、人々は彼女のことをイエスにお願いした。

   (1) 第 1 の奇跡に続いて、第 2 の奇跡がすぐに起こる。
      ①イエスは説教を終えて立ち上がり、会堂を出た。
      ②会堂からシモンの家までは、徒歩で 1～2 分の距離である。

③ルカは、シモンが誰であるかを紹介していない。

＊読者は、すでにシモンのことを知っていたからであろう。

④シモンの家が、カペナウムでのイエスの拠点となる。

(2) 会堂での礼拝を終えると、帰宅して食卓に着くのが当時の習慣である。

①ルカ 14：1

Luk 14:1　ある安息日のこと、イエスは食事をするために、パリサイ派のある指導者の家に入られた。そのとき人々はじっとイエスを見つめていた。

(3) 奴隷がいない庶民の家では、婦人が食卓で仕える。

①ところが、シモンの姑が病気であった。

②医者のルカだけが、「ひどい熱で苦しんでいた」と記している。

③これは、医学用語である。恐らく慢性的熱病であろう。

(4) 人々の間に、イエスに対する信仰が芽生えていた。

①会堂で、イエスによる悪霊の追い出しを目撃した。

②「人々は彼女のことをイエスにお願いした」

2. 39 節

Luk 4:39　イエスがその枕元に立って熱を叱りつけられると、熱がひいた。彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた。

(1) 床に敷物を置き、その上に寝るのが当時の習慣である。

①イエスは、医師が患者を診断する時の姿勢を取った。

(2) 訳語の比較

「その枕元に立って」（新改訳 2017）

「枕もとに立って」（新共同訳）

「その傍らに立ちて」（文語訳）

「And he stood over her」（ASV）

「So he bent over her」（NIV）

①イエスは、慈悲深い偉大な医者である。

(3) 癒しの方法

①「熱を叱りつけられると」

②悪霊の追い出しの場合と同様に、ことばによる癒しである。

③人でなく、病に命じている箇所は、ここだけである。
＊病の擬人化である。

(4) イエスの権威が証明された。
①癒しは直ちに起こり、なんの後遺症も、疲れも残さなかった。
②「彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた」
③悪霊の追い出しの場合も、解放された人はなんの害も受けなかった。

Ⅱ．多くの病人の癒し（40～41 節）

1. 40 節

Luk 4:40　日が沈むと、様々な病で弱っている者をかかえている人たちがみな、病人たちをみもとに連れて来た。イエスは一人ひとりに手を置いて癒やされた。

(1) ここまでで、2 人の人が癒された。
①ここから、大ぜいの人の癒しが始まる。

(2) 日が沈んだ。
①安息日が終わったという意味であるが、ルカは、安息日には触れていない。
②安息日に病人を運ぶことは、律法違反である。
③安息日に癒しを行うのも、律法違反である。
④イエスは、パリサイ的律法を無視して、安息日に癒しを行うようになる。
⑤いろいろな病気の人たちが、イエスのもとに連れて来られた。
⑥悪霊の追い出しと、熱病の癒しが、町全体に口コミで伝わっていたからである。

(3) イエスが採用した癒しの方法
①イエスは、一人ひとりを大切に扱われた。
②手を置いて癒すのは、旧約聖書にはないが、新約聖書ではよくある。
③儀式的な按手ではなく、愛のある按手である。
④神の御手とは、神の力の比ゆ的表現である。
⑤イエスによる癒しは、肉体的、精神的、霊的な領域に及ぶ。

2. 41 節

Luk 4:41　また悪霊どもも、「あなたこそ神の子です」と叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは悪霊どもを叱って、ものを言うのをお許しにならなかった。イエスがキリストであることを、彼らが知っていたからである。

(1) 交差対句法が明確に見られる。

①ルカは、病と悪霊憑きを区別している。

(2) 悪霊どもの知識の進展が見られる。

①「神の聖者」

②「神の子」＝「キリスト（メシア)」

③知っていることと、その権威に服従することとは、別物である。

(3) イエスは、悪霊の証言を認めない。

①悪霊と関連があるかのような印象を与えたくない。

＊悪魔は嘘つきである。

②イエスは、人々から神の子と認められるために地上に来られた。

Ⅲ．宣教の拡がり（42～44 節）

1．42 節

Luk 4:42　朝になって、イエスは寂しいところに出て行かれた。群衆はイエスを捜し回って、みもとまでやって来た。そして、イエスが自分たちから離れて行かないように、引き止めておこうとした。

(1) イエスは、祈りの時間を必要とした。

①前夜の興奮状態や多忙な状態から、自分を取り戻す必要があった。

②次に何をすべきか、父なる神の導きを必要とした。

③狭い空間に大勢の人が住んでいたので､寂しいところを見つける必要があった。

④マコ 1：35

Mar 1:35　さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。

(2) 群衆は、イエスがいなくなったので、捜し回った。

①見つけるまで諦めないという意志が見える。

②イエスをカペナウムに引き止めておこうとした。

2．43～44 節

Luk 4:43　しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」

Luk 4:44　そしてユダヤの諸会堂で、宣教を続けられた。

(1) イエスの使命意識

①ほかの町々にも、神の国の福音を宣べ伝える義務がある。

＊十字架の福音ではなく、神の国の福音である。

②そのために、父なる神から派遣されている。

＊イエスは、父なる神から人類に遣わされた大使である。

(2) イエスは、ユダヤの諸会堂で神の国の福音を宣べ伝えた。

①狭義のユダヤは、イスラエルの地の南部である。

②広義のユダヤは、ガリラヤ地方も含むイスラエルの地全体である。

＊ここでは広義の意味が正解である。

(3) 今回学んだ箇所を、今の私たちの生活に適用してはならない。

①イエスの教えが主であり、奇跡は従である。

②イエスの教えが正しいことを証明するために、奇跡が行われた。

③使徒の働きでも、同じパターンが続く。

結論

1. シモンについて

(1) マコ 1：29 の情報では、4 人の名前が出て来る。

Mar 1:29　一行は会堂を出るとすぐに、シモンとアンデレの家に入った。ヤコブとヨハネも一緒であった。

①ルカは、シモンの名前だけを書いている。

②ルカの福音書では、6：14 でペテロという名に変わっている。

Luk 6:13　そして、夜が明けると弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をお与えになった。

Luk 6:14　すなわち、ペテロという名を与えられたシモンとその兄弟アンデレ、そしてヤコブ、ヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、

③シモンは欠点の多い人物であったが、イエスは彼の可能性を見ておられた。

(2) シモンには妻がいた。

①妻の父が亡くなったので、妻の母を自分の家に引き取ったのであろう。

②1 コリ 9：5

1Co 9:5　私たちには、ほかの使徒たち、主の兄弟たちや、ケファのように、信者である妻を連れて歩く権利がないのですか。

③ペテロは独身であったという教えは、聖書的ではない。

(3) シモンには、家があり、職業があり、家族がいた。

①彼は、カペナウムのユダヤ人共同体に根を張った真面目な漁師であった。

2. シモンの姑について

(1) ルカは、婦人の尊厳を認め、高く評価している。

①エリサベツ（バプテスマのヨハネの母）

②マリア（イエスの母）

③アンナ（女預言者）

④ペテロの姑

(2) ルカ 8：1～3

Luk 8:1　その後、イエスは町や村を巡って神の国を説き、福音を宣べ伝えられた。十二人もお供をした。

Luk 8:2　また、悪霊や病気を治してもらった女たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラの女と呼ばれるマリア、

Luk 8:3　ヘロデの執事クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの女たちも一緒であった。彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。

(3) ルカ 23：49

Luk 23:49　しかし、イエスの知人たちや、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちはみな、離れたところに立ち、これらのことを見ていた。

(4) ルカ 23：55～56

Luk 23:55　イエスとともにガリラヤから来ていた女たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスのからだが納められる様子を見届けた。

Luk 23:56　それから、戻って香料と香油を用意した。そして安息日には、戒めにしたがって休んだ。

ルカの福音書　20 回
最初の弟子たちの招き
ルカ 5：1～11

1. はじめに
   (1) 文脈の確認
      ①イエスはカペナウムに下り、そこを宣教の拠点とした。
      ②イエスの権威は、悪霊の追い出しと病の癒しによって証明された。
      ③イエスは、ユダヤの諸会堂で宣教を続けられた。
      ④イエスは、最初の弟子たちを招かれる。
         ＊シモン、ヤコブ、ヨハネ
         ＊アンデレが省略されているのは、ペテロに焦点を合わせるためである。
      ⑤これまで彼らは、漁師をしながらイエスに従っていたが、転機を迎える。
         ＊彼らのメシア像は、政治的メシアである。
         ＊メシアは、政治的解放者であるが、神ではない（当時の一般的認識）。
         ＊イエスは、正しいメシア像を教えるために公生涯の間、労苦された。

2. アウトライン
   (1) 召命の舞台設定（1～3 節）
   (2) 大漁の奇跡（4～7 節）
   (3) 奇跡の結果（8～11 節）

4. 結論
   (1) 召命へのステップ

最初の弟子たちの招きについて学ぶ。

Ⅰ．召命の舞台設定（1～3 節）

1. 1～2 節

Luk 5:1　さて、群衆が神のことばを聞こうとしてイエスに押し迫って来たとき、イエスはゲネサレ湖の岸辺に立って、

Luk 5:2　岸辺に小舟が二艘あるのをご覧になった。漁師たちは舟から降りて網を洗っていた。

(1) ゲネサレ湖とは、ガリラヤ湖のことである。
   ①ゲネサレは、ガリラヤ湖の北西の地域。カペナウムは真北に当たる。
   ②地域の名称が、湖の名称となった。
   ③イエスは、その辺りの岸辺に立って教えていた（ペテロ召命教会が建っている）。

④「神のことば」とは、「神からくることば」、「福音」のことである。

(2) 群衆が、イエスの教えを聞こうとして、イエスに押し迫って来た。
①群衆は、神のことばに非常な興味を抱いていたことが分かる。
②これは、落ち着いて語れない状態、また、危険な状態である。

(3) イエスは、小舟が二艘あるのをご覧になった。
①漁師たちはその日の仕事を終え、網を洗っていた。
②網は、亜麻糸でできていた。
＊魚に見えるので、この網は夜しか使用しない。
＊魚以外のゴミが網に入るので、洗う必要があった。
③二艘あると書かれているのは、後に出てくる大漁物語への布石である。

2. 3 節

Luk 5:3　イエスはそのうちの一つ、シモンの舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして腰を下ろし、舟から群衆を教え始められた。

(1) イエスは舟を必要とした（奇跡の経済学）。
①イエスはシモンに、舟を陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。
②シモンは、喜んで応答したことであろう。
③彼の舟は、宣教のために用いられた。

(2) 陸から少し漕ぎ出した。
①群衆との間に適度な距離ができる。
②群衆を見渡せる。
③音響効果を利用できる。
④ラビとして教えることができる（イエスは、すわって教えている）。

(3) イエスの知恵と自由な発想
①神殿、会堂が奉仕活動の場であったが、ここでは、舟がその役割を果たした。
②イエスは、いかなる環境にあっても、神のことばを語った。

Ⅱ．大漁の奇跡（4～7 節）

1. 4 節

Luk 5:4　話が終わるとシモンに言われた。「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい。」

(1) これは、落胆したシモンへの命令のことばである。

①イエスは、深みに行けば、魚が大量にいることを知っていた。
②このことばは、字義通りに解釈する必要がある。

(2) この命令には、無数の適用がある。
①人間の落胆は、神のチャンスである。
②人間的判断で行う奉仕は、疲れる。神の導きに頼る必要がある。
③ルカの福音書では、「深み」とは異邦人世界の象徴と考えられる。
④使 10 章で、ペテロは敷布に入れられた不浄食物の幻を見ることになる。

2. 5 節

Luk 5:5　すると、シモンが答えた。「先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。でも、おことばですので、網を下ろしてみましょう。」

(1)「先生」は、ギリシア語で「エピスタテイス」（エピスタタ）である。
①これは、ヘブル語の「ラビ」のギリシア語訳である。
②シモンはイエスを、ラビと呼んでいる。
③宗教的なテーマなら、ラビの指示に従うのは当然のことである。

(2) イエスの命令は、漁に関するものである。
①これは、シモンの専門分野である。
②「私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした」
③魚は、夜、岸に近い浅瀬で獲れる。
④イエスの命令は、漁師の常識に反するものである。
⑤イエスの専門分野は、大工仕事である。

(3)「でも、おことばですので、網を下ろしてみましょう」
①相当な信仰がないと語れないことばである。
②シモンの従順から教訓を学ぼう。

3. 6 節

Luk 5:6　そして、そのとおりにすると、おびただしい数の魚が入り、網が破れそうになった。

(1) イエスの命令に従順に従った結果、大漁になった。
①刺し網は破れそうになった（漁師だから分かる）。
②イエスは、自然界を支配しておられる。
③大漁は、謙遜な心、教えられやすい心、従順な心に対する報酬である。

4. 7 節

Luk 5:7　そこで別の舟にいた仲間の者たちに、助けに来てくれるよう合図した。彼らがやって来て、魚を二艘の舟いっぱいに引き上げたところ、両方とも沈みそうになった。

(1)「仲間の者たち」に合図した。

①漁は、共同作業である。

②網や舟を共有し、作業効率を上げた。

③シモンの家とゼベダイの家とは、協力関係にあったのであろう。

(2) 余りの大漁で、二艘とも沈みそうになった。

①実際に沈んだわけではない。

②これは、嬉しい悲鳴である。

Ⅲ. 奇跡の結果（8～11 節）

1. 8～9 節

Luk 5:8　これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して言った。「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」

Luk 5:9　彼も、一緒にいた者たちもみな、自分たちが捕った魚のことで驚いたのであった。

(1) ルカは、シモンに焦点を合わせて描いている。

①シモン以外の者たちも、同様の反応を示したはずである。

②ここでは、「シモン・ペテロ」というフルネームになっている。

③極端から極端に行くのは、シモンの特徴である。

④彼は、イエスの足元にひれ伏した。

(2)「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから」

①「先生」（ラビ）から「主よ」（キュリオス）への変化が見られる。

②イエスは文字通りには、舟から離れられない。

＊「私の罪を赦して下さい」

＊「あなたのようなお方が、私と何の関係があるのですか」

③神に出会うと、自らの罪深さを認識するようになる。

2. 10 節

Luk 5:10　シモンの仲間の、ゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです。」

(1) ヤコブとヨハネも、同じ経験をした。

①アンデレの名は出て来ないが、彼も同じ経験をした。

(2) 彼らの職業は、魚を獲ることから、人間を獲ることに変えられた。

①漁師は、生きている魚を殺すために獲る。

②人間を獲る漁師は、死んでいる人を生かすために獲る。

③大漁の奇跡は､使徒たちの伝道によって多くの魂が救われることの予表である。

3. 11 節

Luk 5:11　彼らは舟を陸に着けると、すべてを捨ててイエスに従った。

(1) 漁業は、ガリラヤ湖周辺では最も人気のある職業で、利益も大きかった。

①彼らは、その安定した職業を捨てて、イエスの弟子となった。

結論：召命へのステップ

1．神との出会い

(1) ペテロは、イエスが神であることを体験した。

①カナの婚礼、エルサレムでの奇跡、悪霊の追い出し、姑の癒し

②大漁の奇跡は、ペテロの専門分野での奇跡である。

③また、日常生活における奇跡である。

④ペテロは、実存的に神に出会ったのである。

(2) 真の宗教体験は、神との出会いから始まる。

①聖書の神を求める心が、最も重要である。

(3) 神との出会いは、勤勉な生活の中で起こる。

①ペテロは、漁師として働いていた。

②今与えられている仕事に忠実に歩むことは重要である。

2. 罪の認識

(1) 神の臨在に触れた時に、人は自らの汚れと罪を認識するようになる。

①ペテロの体験は、普遍的なものである。

(2) イザヤの体験

Isa 6:5　私は言った。／「ああ、私は滅んでしまう。／この私は唇の汚れた者で、／唇の汚れた民の間に住んでいる。／しかも、万軍の【主】である王を／この目で見たのだから。」

3. 罪の赦し

(1)「恐れることはない」（ルカ 5：10）

①信仰による救いが提供された。

②今の私たちは、福音の三要素を信じて救われる。

(2) イザヤの体験

Isa 6:7　彼は、私の口にそれを触れさせて言った。／「見よ。これがあなたの唇に触れたので、／あなたの咎は取り除かれ、／あなたの罪も赦された。」

4. 召命

(1)「今から後、あなたは人間を捕るようになるのです」（ルカ 5：10）

(2) イザヤの体験

Isa 6:8　私は主が言われる声を聞いた。「だれを、わたしは遣わそう。だれが、われわれのために行くだろうか。」私は言った。「ここに私がおります。私を遣わしてください。」